

移民の表象

—在日（日系）ブラジル人による文学および映像表現の実践から—

アンジェロ・イシ

目次

一、 在日ブラジル人による表象の意義

二、 文学篇

1) エスニック・メディアへの投書

2) ドキュメンタリー・タッチの小説

3) 音楽の歌詞

三、 映像篇

1) テレビ番組

2) 映画

四、 表現法の多様化と二世による映画の誕生

一、 在日ブラジル人による表象の意義

日本に住む日系人を中心としたブラジル出身の人々をめぐる「諸問題」については、マスコミによる報道や研究者による論述などによって大量の記録が蓄積され、語り尽くされたという感さもある。しかし、これらをむやみに採取して満腹感をおぼえている者がいるとすれば、「偏食」の可能性があることに気づかねばならないだろう。移民に関する既存の記録が、彼ら彼女ら（以降、「かれら」と表記）の素顔や本音に果たしてどの程度、迫ることができているのだろうかという問いを常に繰り返す必要がある。移民「について」は多くが語られていても、かれ

ら「による」語りはまだまだ少ない。また、移民が文筆や映像などの各分野で生み出してきた作品群の内容の解説やその社会的意義に関する分析は皆無に等しい。そこで本稿では、移民自身による文筆および映像表現の実践を紹介・分析し、その可能性や限界について考えてみたい。

ここで取り上げる移民とは、「日系人労働者」や「出稼ぎ労働者」と呼ばれる人々である。しかし、私は次のような理由から、別の呼称を用いることにしている。まず、デカセギを漢字ではなく、カタカナ表記している。その理由は、ブラジルの国語（ポルトガル語）の主要辞書にこの言葉が掲載されるほど、「dekassegui」（ブラジルや日本で発行される移民の新聞や雑誌、いわゆるエスニック・メディアが用いる表記）や「decasségui」（最も権威のある辞書、Dicionário Houaiss での表記）が一般的な用語として定着しているからである。

次に、「日系人」ではなく、日本在住のブラジル国籍者の総称として「在日ブラジル人」という表現を優先している。むろん、日本の出入国管理法による制限のため、その圧倒的多数は日本人の子孫ではあるが、日系人の配偶者や養子として、「日系」ではない人々も少なからず来日

している。本稿では、例えば、アフリカ系の子孫の「非日系」のブラジル人作家も分析対象としているが、「日系（ブラジル）人」という呼称は、「日本人の子孫」ではない彼のような存在を隠蔽する危険性をはらむ。ところで、「在日」という頭文字を用いる動機としては、日本滞在の長期化や意識の変化を示すという戦略も挙げられるが、ここではこれについて深入りはしない。

在日ブラジル人の数は、外国人登録をされている者だけでも、すでに31万人を超えている。その大多数は、自動車や電化製品などの製造業で、いわゆる3K（きつい、汚い、危険な）労働に従事している。とりわけ1980年代後半から1990年代前半にかけて来日した先発組の大多数は、トヨタをはじめとする日本のブランド企業の下請けや孫請け工場に、仲介業者を通して派遣された。そういうパイオニアの苦悩は、少なくとも三つの表現法で克明に記録されている。それはエスニック・メディアへの投書、小説、そして音楽の歌詞である。本稿ではこれらを便宜上、「文学篇」として分類する。そして本稿の後半では、移民による映像表現の実践を「映像篇」という総称で表し、やはり便宜的にテレビ番組と映画に分類して紹介する。

なお、本稿で紹介する表現者に対しては、イシイとナシメントを除く全員に何らかの形で面談を試みたことも強調しておきたい。

二、文学篇

1) エスニック・メディアへの投書

エスニック・メディア（エスニック・マイノリティ集団による／のための新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等）は、在日ブラジル人の自己表現の場として、極めて重要な役割を果たしてきた（イシ、二〇〇二、二〇〇六）。本稿では、ブラジル人向けの新聞やテレビの報道やオビニオン欄でどのように移民が表象されるかについては踏み込まないが、新聞社が読者からの投書を基に作成した単行本を、「デカセギ文学」の先駆けとして位置づけてみたい。

ブラジル人向けの新聞の老舗として認知されている International Press を発行しているインターナショナル・プレス社が1994年に出版した『A Quebra dos Mitos』（『神話の崩壊』）は、新聞社宛に送られてきた読者からの投書をテーマごとにまとめ、研究者や専門家に関連エッセーを依頼して単行本に仕立て上げたものである。同書は後に邦訳され、『期待はずれのニッポン』という題名で出版されている。私は当時、留学生として在日ブラジル人研究に取り組んでいたが、同書で「偏見と差別」や「郷愁の念」に関する章のエッセーを担当した。興味深いのは、少なからぬ数の読者がポエム形式で投書していたことである。数々の投書からは、日本で差別を受けて味わった挫折感や孤立感、そして母国を離れたことによって抱いている孤立感や断絶感が顕著であった。

International Press の競合紙、Jornal Tudo Bem

を発行しているパトリモニオ・トウキョウ社が
発行したもう一冊、『Dekassegui - Os Exilados
Econômicos 』（『素晴らしき夢——出稼ぎ』
1995）は、ポルトガル語と日本語のバイリンガ
ル構成となっている。前述した著書と決定的に
異なるのは、本書が作文コンテストを開いて、
単行本として出版されることを前提とした投稿
を促したという点である。選ばれた 32 点には、
喜怒哀楽に満ちた様々な物語が綴られているが、
興味深いのは本の日本語のタイトルがデカセギ
を「素晴らしき夢」と肯定的に総括しているの
に対し、ポルトガル語のタイトルが「経済難民」
（もしくは「経済棄民」）という負のイメージを
付与している点である。なぜ、両言語での題名
にこのような乖離が生じたのか。おそらく編集
者としては、ブラジル人読者に対しては素直に
経済難民的な側面を認めるタイトルで構わない
が、日本人読者に対しては見栄を張ろうという
意図で、大志を抱いて海を渡った「夢追い物語」
という肯定的なイメージを強調したのだと考え
られる。編集責任者の橋本陽一はバイリンガル
の日系ブラジル人である。私は当時、幾度と
なく彼と意見を交わしたが、彼が日本のマスメ
ディアによるデカセギ関連の報道を綿密にチェ
ックしている様子が印象的であった。その鋭い視
線が、後述するテレビ・ドラマの脚本で余す
ところなく生かされている。

2) ドキュメンタリー・タッチの小説

在日ブラジル人の先発組による表現法のもう
一つのトレンドとして、自分の実体験を（ノン・
フィクションの小説という形で文字化する人が
複数名いたという点が挙げられる。私は複数の
人から、「自分は今、日本で体験を書いている。
近いうち、本として出す」という予告を聞か
された。しかし、実際に出版までこぎ着けられ
た例は極めて少なく、象徴的なことに、最も有
名な二冊は著者がブラジルに帰国してからよう
やく発行された。なぜ、かれらは日本にいう
うちに出版できなかったのか。理由の一つは、日
本を離れてみないと、自分の体験が相対化でき
ず、消化し切れなかったために筆が進まなかつ
たらだろう。しかしさらに重要なもう一つの理
由は、かれらが日本では人脈がないけれど、ブ
ラジルならば出版界とのパイプ役を有したとい
う点である。さらには、物価の格差のため、日
本よりもブラジルの出版費用が割安になるた
め、日本で稼いだ限られた資金の価値が増すとい
う事情も無視できない。

では、肝心な小説の内容について簡潔に述べ
ることにしよう。「デカセギ文学」なるものが存
在するならば、その記念すべき初代作品の筆頭
候補は、1997 年に出版されたシルヴィオ・サム
による『Sonhos que de cá segui』（サンパウロ市
の日系出版社、Ysayama Editora より発行）であ
る。ポルトガル語で *de cá segui* は「ここから（何
かを）追って出発した」と直訳できるが、それ
をデカセギという言葉に引っ掛けて、「ここから

夢を追って出発した」というタイトルになっている。ブラジルから日本に向かった普通の人々の体験が綴られるが、移民の屈折ぶりは例えば次のような形で表現される。作中の登場人物がカラオケで、長渕剛の名曲「トンボ」のメロディに乗せて、替え歌を熱唱する。曲目は「Dekokôssegui」「デココセーギ」。Kokóの発音(cocô)は、ポルトガル語で大便を意味する。デカセギ体験を他でもない「ウンコ」に例えているのである。その歌詞を邦訳すれば、次のようになる。

(ウンコ) コ、コ、コ、コ、コ、コ...

やっと気分がよかった、下すことができたので。

でも告白しよう、一分前は、泣いてしまった。

日本での就労に対するぼくの感想とはいえば、

力を入れすぎて、臭くなって、手を汚す、

そして、あの冷や飯で我慢しなければならぬ。

母ちゃんがいつも作ってくれていたあの料理がなんと懐かしいことか。

だから、ブラジルに戻りたい。そして、全てをアソコに放り投げたい...

この歌詞の「アソコ」とは、「地獄」もしくは「君を生んだ売女」のことであり、何か（あるいは誰か）に対して激怒している時にブラジル人が連発する国民的スラングを、きつい表現は避けながらも、文脈から連想させるように書かれている。著者のサムにインタビューで尋ねた

ところ、この歌詞は彼の創作であり、誰かが実際にカラオケで歌っていたものを書き留めたわけでもなければ、自分がその替え歌を実際のカラオケで歌ったわけでもない。しかし、タイトルにしても歌詞の内容にしても、デカセギの汚く、きつい側面を、排便という比喻を通して強烈に匂わせることに成功している。

サムに比べ、より叙情的な作品を出版したのは、アジェノール・カカズである。彼も、サムと同様、日本での工場労働を経験したが、日本での「今、ここ」よりも、生まれ育ったブラジルの「思い出、記憶」をより多く記述することによって、より明るい内容や文体になっている。また、サムの書物と違って、これは書き下ろし原稿ではない。前述した在日ブラジル人向け新聞、Jornal Tudo Bem にカカズが連載したコラムを単行本化したものである。

当時、私は同紙の編集長を務めていたが、彼のコラムのために紙面を割いたことが一冊の本を生む上で役立ったことを知って、あらためてエスニック・メディアの存在意義を実感した。出版年は1998年だが、コラムが掲載されたのは1996年から1997年にかけてなので、執筆時期はサムの小説と重なる。本の題名は連載コラムをそのまま引用して、『Crônicas - De um garoto que também amava os Beatles e os Rolling Stones』（『クロニクル——ビートルズもローリング・ストーンズも愛した少年より』、サンパウロ州ジュンディアイ市の Literarte 出版社より発行）。ブラ

ジルという「場所」よりも、懐かしい青春とその「時代」に対する郷愁がタイトルからも漂って来る。

他方、静岡県在住のジェラルド・ナシメントが2000年に自費出版したエッセ一本、『Japão: a soma dos resultados』（『日本：結果の合計』、Meka発行）は、著者が日本に在住し続けている点や、日系人ではなくアフリカ系のブラジル人であるという点において、前述した二冊とは異なる。内容は自己啓発的なメッセージに満ちたエッセーだが、切り口は凡庸で、大きな反響を呼ぶには至らなかった。作者はブラジルで銀行の副支店長にまで昇進したが、経済的な事情のため来日し、日本で工場労働を経験して執筆活動に開眼したようだ。2004年には二冊目の著作を自費出版したが、作品よりも、むしろ、静岡県浜松市でブラジル人向けのブックフェアを開くなど、読書習慣の普及に尽力するナシメントの積極的なイベント・プロデュースこそが、メディアの関心を集めている。

この他、映画マニアを自認するモリマサ・ミヤザトが自費出版したものとして、『More no Japão』（「日本に住め」という意味のポルトガル語を、自分の愛称である「More」を語呂合わせたタイトル）という、日本に関する基礎知識から映画論までを辞典形式で綴った珍品もある。

3) 音楽の歌詞

ごく少数の人々しか試みていない文筆活動と

は対照的に、在日ブラジル人による音楽活動は、質量ともに、豊作に恵まれてきた。デカセギを経験した音楽家が作詞してきた歌詞の数々は、移民の表象や意識の変化を探る上で絶好の材料である。

中でも示唆的な歌詞が満載されているのは、1997年に自主制作されたコンピレーション・アルバム、『Kaisha de Música』である。私はこのCDの制作を応援し、発案者のエンヒー・アサオカをインタビューし、複数の論文でその歌詞の解説にも挑んだ（イシ、二〇〇三、Ishi 2003）。本稿では、一例のみを紹介するに止める。アルバム・タイトルと最も関連が深い「Kaishão」という曲である。

すごい暑さ、夏だ、毎日
オレはひどい目に遭う
300度近くの温度で
バカヤロウ！毎日のように工場のラインでの作業を
暑い目に、寒い目に
A ボイラーの入り口で
汗をたらすオレを、
消耗しつつオレを、
動物のようにみじめな目に遭っているオレを、
日本人はただ眺めるばかり
（一部、省略）
時間は過ぎる、そしてオレは闘い続ける
日本の野郎が豚のように
熟睡している間に

(一部、省略)

オレと同じ日に入社した女の子は
妊娠のために今日、首になった
時は過ぎる、時はダマす、時は考える
オレはプレスで指を一本なくした
やめるタイミングを逃した
斡旋会社も、斡旋業も、斡旋業者も、
カネのためならケツまで捧げる
人肉食斡旋業者ども、
人間とカネと残骸を食う奴ら
後ろからも前から
自分の利害だけを考えて
彼らにとってはどちらでもかまわん
後ろからでも前から
彼らにとってはどちらでもかまわん

(一部、省略)

オレがいつかブラジルに戻るまで待ってくれ
このクソったれ野郎どもを
産んだ「売女」の元に送り戻すから

移民を搾取する斡旋業者に対する怒りを爆発させているこの歌詞を貫くストレートな表現が、前述したサムの小説の作中に登場する「デココセーギ」の歌詞に似通っていることは、一目瞭然である。「デココセーギ」の作者は自制してスラングを連想するだけに止めていたが、『Kaishão』の締めくくりでは、そのスラングを一語一句、大声で叫ぶことによって、ストレス発散が促される。『Kaishão』とは、日本の「kaisha

＝会社」と、「caixão＝死体を納める棺」とを語呂合わせした造語である。デカセギが、人肉食の斡旋業者にレイプされ、残骸を食われる危険性を伴う「死」に例えられている。

同アルバムには、絶望感から抜け出し、日本に定住することに対して多少は前向きな姿勢を模索している様子を示す（あるいは、つらい現状をより素直に受け入れる諦めが伝わる）歌詞もある。しかし、1990年代前半においてはまだエスニック・メディアはさほど発達しておらず、活字・映像資料とも不足しているだけに、Kaishãoのような歌詞は、デカセギ・ブーム初期の先発組が味わった機械化＝非人間化に対する嫌悪感の度合いを記録した、貴重な史料となり得るのではなかろうか。

三、映像篇

1) テレビ番組

在日ブラジル人向けのテレビ放送市場は、SKY PerfecTV（スカパー）で二つのチャンネルを所有する東京のIPCテレビに独占されていると言っても過言ではない。他にもインターネットで視聴できる映像配信サービスはあるが、本格的な番組制作体制を整備しているのはIPCテレビのみである。同局はこれまで、幾つかの自主制作のドラマを放送してきた。うち連続ドラマは一つだけで、『A cor do seu dinheiro』（『あなたのお金（札）の色』）という、デカセギ後にブラジルに戻ってビジネスを起業しようとする

人々の物語である。

脚本と演出を担っているのは、前述した単行本、『すばらしき夢...』の編集を担当した橋本陽一である。私が最も評価しているのは、単発ドラマの『Vaga para um japonês em apuros』（『困っている日本人に仕事を紹介する』）である。リストラされた日本人サラリーマンの再就職を、工場で働くブラジル人の若者たちが助けるという、奇想天外なプロットが目を引き。

このドラマについては、「かわいそうなデカセギ者」というステレオタイプを覆す点が画期的で、映画『月はどっちに出ている』で描かれている在日コリアンのプライドに通じる内容であると分析した（イシ、二〇〇二、二〇〇五）。しかし、いかなる「日本人との関係の在り方」が提唱されるかという点も注目値する。

単に助ける側（ブラジル人）と助けられる側（日本人）の役割が、マスメディアで流通する関係性に対して逆転しているという点よりもさらに痛快なのは、ブラジル人のおかげで再就職を果たした日本人の変貌ぶりである。彼はさっそくポルトガル語と日本語の辞書を買ってポルトガル語を覚えようとする。週末にブラジル人に誘われて、家族連れでアウトドアのバーベキューに合流する。そこでは、ブラジル人男性がブラジル流の挨拶で彼の妻の頬にキスをするが、夫婦ともども、まったく怒りも嫌がりもしない。ドラマ制作者は、多くの在日ブラジル人が思い描くであろう理想論や願望を脚本に盛り込んだ

ようだ。日本人にはもっとポルトガル語を学習してもらいたいし、ブラジル人の行動ぶりに理解を示してほしい、という願望である。「郷に入っては郷に従え」という同化論に真っ向から対立するメッセージが、ここに込められている。

本作は、しかし、安易なブラジル文化の押しつけに終始していない。日本人はバーベキューにサッカー・ユニフォーム姿で現れるが、ブラジル人男性は逆に、「切磋琢磨」という漢字がデザインされた T シャツを纏っている。つまり、日本語に敬意を表しているのだ。

日本人夫婦はおにぎり（日本食の象徴）を持参し、ブラジル人らはそれを喜んで食べる。逆に、日本人男性は肉をパンに挟んで、ブラジル流の食べ方をしている。制作者がどこまで意図したかは別として、「互いに歩み寄ろう」というメッセージが読み取れる作品に仕上がっている。

2) 映画

「映画監督」という肩書きを堂々と名乗れる在日ブラジル人は今のところ、まだ誕生していないが、興味深い短編や長編映画が数本発表され、その作り手たちは映像作家としての認知度を上げつつある。最も多くの観客に鑑賞されたのは、恐らく『Mundo Nikkei - Os brasileiros do outro lado do mundo』（『日系の世界——地球の反対側のブラジル人たち』）であろう。この作品は冒険家のヴェラとユリ・サナダ夫婦によって制作され、パイロット版が2005年に日本各地のブ

ラジル人集住地で、日本語字幕付きで上映された。サナダ夫婦によれば、同作品はブラジルの大手銀行の出資を得て、同国での劇場公開を念頭に置いて制作された（2008年3月にサンパウロ市でロードショー公開を実現）。

サナダ夫婦は日本を含む世界各地を旅行した後、二つの企画を考案した。一つは日本に住むブラジル人の現状を紹介するばかりでなく、同時に日本の魅力をも、半ば観光ガイドのように紹介するドキュメンタリー作品の制作である。もう一つは、日本で自作を含む様々なブラジル映画を上映する「ブラジル映画祭 ニッポ・シネ・ブラジル」の実施である。

第一回の映画祭は2006年に開催され、主としてブラジル人が集住する都市（愛知県豊橋市、静岡県浜松市、群馬県大泉町など）の公共施設を借りているのが特徴である。一部の作品には日本語の字幕も付けられているが、日本人の観客よりも、むしろ日本で生まれ育って一度もブラジル映画に触れたことがない青少年や、言葉の壁（日本語の字幕が読めないこと）を理由に、来日後は映画館から足が遠のいたブラジル人たちに娯楽の機会を与えようというのが趣旨だという。

2007年5月、第3回の映画祭開催のために来日したサナダ夫婦を武蔵大学に招き、『日系の世界』のパイロット版の公開上映会を開いた。作品では、ユリがカメラを回し、ヴェラがマイクを持ってレポーター役を務める形で、日本各地

を駆け巡るロードムービー形式を取っている。各地で活躍するブラジル人が次々と登場し、細かいカットとハイテンポでビジネスから教育まで、様々な側面が網羅されている。作品の宣伝パンフには、「遠い国に存在するブラジル人コミュニティの夢、希望と生活に関するドキュメンタリー」という謳い文句が綴られている。

観客からの反応は、圧倒的な情報量を賞賛する声と、テーマを絞りきれておらず、情報を詰め込みすぎて深みに欠けるという声に二分した。私は両意見とも一理あると考える。マスメディアがあまり光を当てないブラジル人のホワイトカラー組（「脱工場労働」を果たした人々）が幾人も登場し、堂々と成功への道のりを語っている点は評価できる。また、工場労働者を含め、画面に映る人物の大多数が笑顔を見せ、苦労話までもが全体的には明るいトーンで紹介されているという点が目を引く。日本のマスメディア報道では、深刻な表情の人々が画面を支配し、ブラジル人が抱える（あるいは引き起こす）「問題」ばかりが暗いトーンで語られるのが常である。そういう移民の表象しか目の当たりして来なかった観客は、在日ブラジル人の素顔（あるいは、「別の表情」）に新鮮味を感じるに違いない。

一方、本作の限界は、あまりにも単純かつ不十分な解説や問題提起に終始しているという点である。サナダ夫婦が映像制作の専門教育を受けていないせいかもしれないが、構成や編集法

があまりにもブラジル最大手のテレビ局、グローボの看板ドキュメンタリー番組（Globo Repórter）に似通っている。インタビューされる人物の選定基準にしても、エスニック・メディアでいつも取り上げられる「有名人」を優先しているきらいがある。在日ブラジル人の実情について無知な観客にとっては、要領の良い「入門書」として役立つかもしれないが、それ以上の内容を求める者にとっては物足りない。そのより高度なニーズに見事に対応してくれるのが、次に紹介するエリオ・イシイである。

イシイはブラジルの名門、サンパウロ大学で社会科学を学ぶ一方、プロの映像作家に師事して映像づくりの理論と技術の両面を身につけた上で映画プロダクションを立ち上げた。しかし、当初は軌道に乗らず、デカセギ目的で来日して工場労働も経験した。帰国後、彼は移民や日本と無関係の実験的な映像制作も試みたが、2004年には、デカセギを主題にした初の作品、『Cartas』（「手紙」の複数形）を発表した。

私はこの作品のテーマ設定のオリジナリティ、問題意識の奥深さ、作品に滲む作者の倫理観と被写体への温かい眼差し、洗練された編集などに感銘を受けた。そして数少ない上映会でこの作品に触れた知人は誰もが口を揃えてこの作品への共感を表明した。したがって、同作品が今年（2008年）、日本語字幕付きで、イシイが2006年に発表した『ペルマネンシア——この国にとどまって』と合わせて日本の配給会社よりDVD

という形で同時リリースされると聞き、その宣伝パンフレットに推薦文まで寄稿した次第である。

『カルタス——日本からの手紙』（配給：アムキー）では、デカセギを経験した4人の日系ブラジル人女性（うち、一人は画面には登場せず、書いた手紙だけが声優によって朗読される）が、飾り気のない語り口で、饒舌に持論を交互に語る。単に体験を振り返るのではなく、語りは日本人論、ブラジル論、家族論、移民論と、多岐にわたる。頻繁に挿入される、必ずしも語りとは関係のない映像は、観客の想像を膨らませる上で絶大な効果を上げている。

この作品の最大の特長は、女性の視点が重視されていることだろう。ある女性は、「私たちはそれなりの収入があったから、日本に稼ぎに行く必要はなかったのに...でも、彼はやっぱり行くと決めてしまった」と、淡々と語る。作者は、女性たちの声を通して、経済的な豊かさの追求を最優先する論理に対する嫌悪感を露にしている。社会科学を学んだことが、ジェンダー問題をはじめ、移民をめぐる弱者の視点により敏感になるための土台づくりとして役立ったという推測に無理はなからう。

作品づくりはデジタル技術の恩恵を全面的に受けている様子だが、主題として、アナログなコミュニケーション手段である手紙が選ばれたという点にも、作者の主張が垣間みられる。在日ブラジル人のメディア利用史を整理すれば、

手紙のやりとりは、極めて1990年代前半的なものであることに気づく。その後は国際通話の価格が劇的に安くなり、やがてはインターネットの普及で、日本とブラジルとの間の連絡手段における手紙の相対的なステータスは急激に低下することになる。しかし、自筆の手紙には、メールのやりとりにはない独特の個性、温かみ、オーラがある。イシイはそれを熟知しているかのように、数々の手紙に綴られた字をクローズアップして画面に焼き付ける。

4人の女性が語るデカセギ体験もまた、パイオニアならではの極めてほろ苦い体験である。その意味では、制作日時は2004年ではあるものの、これは90年代という、近いようで実は（とくに若い世代にとっては）縁遠い過去として急速に風化しつつある時代の「移民の記憶」を映像化した貴重な作品である。

四、表現法の多様化と二世による映画の誕生

日本で流通している（日系）ブラジル人に関する報道や表象は、あくまでもホスト社会の側の都合、利害、視点、偏見、先入観等に支配されている（Ishi 2008）。それだけに、移民の中から表現者が徐々に増えてきたことは、大いに歓迎されよう。本稿で紹介した作品は、その完成度は別として、思いがけない切り口で、移民の体験や日本（人）との関係を描いている。

表現方法や使用媒体の多様化も著しい。演劇、絵画展、写真展などを手がける（あるいは既存

の催しに加わる）者も出現し、とりわけブームになっているのが写真撮影である。写真家の組合まで結成され、エスニック・フリーペーパーの誌面等で作品を発表する事例もある。報道写真の撮影で腕を上げ、芸術写真に挑む写真家もいる。

いわゆる「在日ブラジル人一世」による作品は、一部を除いて、ポルトガル語でのみ制作され、ブラジル系のショップや流通網でしか入手できない。その意味では、日本語の字幕付きでDVDが発売されたエリオ・イシイの作品や、日本語とポルトガル語を交えた歌詞が対訳の歌詞カード付きで、一般のCDショップでも購入が可能な天才s MCsの音楽（イシ、二〇〇五）は、新たな地平を切り開いているといえよう。

同胞に向けた傷の舐め合いを乗り越え、ホスト社会に向けて発信するという意味で注目したいのは、日本生まれの（あるいはブラジルで生まれたが日本で育った）在日ブラジル人二世や準二世による映像表現である（イシ、二〇〇七）。今年、大学に入学したルマ・マツバラが中高時代に発表したビデオ作品の『レモン』や『ヒョジョンへ』では、韓国系日本人を名乗る松江哲明の『あんによんキムチ』などにも通じるアイデンティティ探しが、一人称で、日本語話者の観客を想定して語られる。

ただし、これまで私は表現（者）の出現そのものを肯定してきたが、今後はその表現の中身を吟味し、そのメッセージがいかに在日ブラジ

ル人や日本人に解釈・曲解されているかを、より厳しく追及する必要がある。現時点では、本稿で紹介した文学・歌詞・映像作品は、どちらかといえば無関心にさらされ、いずれも大きな反響を呼び起こすには至っていない。「同胞」あるいは「コミュニティ」を「代弁」しているかという点については、留意が必要である。

もう一点、注目を要するのは、インターネットを媒介とした表現者のトランスナショナルなネットワーク構築に向けた動きである。米国を拠点としたブラジル作家のアンジェラ・ブレタスの発案で、各国に離散しているブラジル人移民の短編小説や詩を募集して単行本として2004年に出版された『Brava Gente Brasileira em

terras estrangeiras』（『異国の地における勇敢なブラジル人たち』）はブラジルの大手メディアでも話題を呼び、2005年には第2巻も刊行された。前述したカカズを含め、複数名の在日ブラジル人が共同執筆者として名を連ねている。

最後に、忘れてはならないのは、今年（2008年）は、日本からブラジルに最初の移民船が渡ってちょうど100周年「記念」となる、節目の年であるということだ。同時に、一部の人々は、ブラジルから日本への「デカセギ20周年」でもあると主張する。これにちなんで、文筆、音楽、演劇、映像などによる新作の企画や、既存の作品の発表の機会が増えている。この動きについても、機会をあらためて論じたい。

参考文献

- Ishi, Angelo, 2003, 'Searching for Home, Wealth, Pride and "Class": Japanese-Brazilians in the "Land of Yen"', in Lesser, Jeffrey (ed.) *Searching for Home Abroad: Japanese-Brazilians and Transnationalism*, Duke University Press.
- , 2008, 'Between Privilege And Prejudice: Japanese-Brazilian Migrants in the Land of Yen and the Ancestors', in Willis, David Blake & Murphy-Shigematsu, Stephen (eds.) *Transcultural Japan*, Routledge Curzon.
- イシ、アンジェロ（二〇〇二）「エスニック・メディアとその役割——在日ブラジル人向けポルトガル語メディアの事例から」宮島喬・加納弘勝編『国際社会第2巻 変容する日本社会と文化』東京大学出版会
- （二〇〇三）「在日ブラジル人にとっての音楽と芸能活動の意味と意義——“デカセギ移民の心”を歌ったCDとその制作者の事例」白水繁彦（研究代表者）文部科学省科学研究費報告書『「われわれ」の文化を求めて——民族・国境を越える「エスニック」エンターテインメント』
- （二〇〇五）「在日」の闘い方——コリアンとブラジル人の接点と相違点『アジア遊学』76号 勉誠出版
- （二〇〇六）「在日ブラジル人メディアの新たな展開——ポルトガル語新聞からインターネットを活用した多言語メディアの時代へ」『国文学 解釈と観賞』第71巻7号 至文堂
- （二〇〇七）「在日」になったブラジル人のトランスナショナルな模索『現代思想』6月号 青土社